

目次

アンチカップリング..... 4

アンチカップリング

Web 再録本に、オフのみ掲載としたい。1〜2万字程度。

<プロット>

Ⅰ ブラックペアンの事件をきっかけに静岡の東城大を離れ、実家である出雲の近くの病院で働いていた渡海先生のもとへ、佐伯先生が会いに来た。病院の廊下トンビたちは、東城大にいたときの二人は愛人関係にあったという噂を持ち出し、そのことを隠れて揶揄した。腕のない医者が戯言を言っても渡海先生は何も気にならなかった。しかし、根も葉もない噂話に対する佐伯先生の心情を慮った渡海先生は、佐伯先生に帰れと言う。しかし、佐伯先生は逆に渡海先生に急用がないのを本人に確認すると、無理やり休暇を取らせ、今日明日は帰らない、と外へ連れ出すのだった。

Ⅱ 廊下トンビたちの噂がますますひどくなることを心配する渡海先生をよそに、まとまった休みが取れたから、一緒にどこかに行きたくて。と佐伯先生は言う。嫌だったら帰っていいよ、と佐伯先生はいうけれど、渡海先生は拒否しない。

Ⅲ 渡海先生の回想。昔はよく二人で食事した。渡

海先生の父親が生きているときは、両親と佐伯先生の4人で旅行にも行った。佐伯先生に誘われるのは、渡海先生にとって決して嫌なことじゃなかった。むしろ昔のようにこうして話せる時間が取れることが嬉しかった。だから、佐伯先生からの誘いを断れなかった。

Ⅳ 中国地方を佐伯先生の車に乗って旅行する二人。宿は佐伯先生が取ってくれた。

Ⅴ 道中、佐伯先生は東城大が今どうなっているのか、といった仕事の話をせず、渡海先生も、自分は今何をしているのかを話さなかった。車の中で、渡海先生は唐突に、どうして自分を連れ出したのか、と問うが、佐伯先生は、本当に特に意味はないんだ。と言った。東城大に帰ってきて欲しいと思っているんじゃないのか、と渡海先生が問うと、お前の好きにしたらいい。と佐伯先生は返す。

Ⅵ 宿で酒盛りをする二人。廊下トンビたちの噂話の話題になった。渡海先生は、根も葉もない噂話に、佐伯先生が傷ついているのではないかと心配する。佐伯先生は、そういう噂は言われ慣れているから大丈夫。というので、渡海先生は安心する。佐伯先生は、心配してくれてありがとう、と言うと共に、渡海先生こそ大丈夫なのかと心配し

たが、渡海先生も、気にしていないから大丈夫と言って、二人で笑いあった。

「話はさらに盛り上がる。お前が自分を超えるまで成長するさまを見たい、という佐伯先生。渡海先生は、あなたは俺の尊敬する医者だから、ヒラの手術職人なんかよりずっと先をいってないとダメです。と反論する。先生のオペをずっと見ていたんです。と照れ臭そうにいう渡海先生を、佐伯先生は息子を見るような目で愛おしく思った。

の 病院に戻ると、看護師たちが興味深そうに渡海を見ていた。「先生、楽しい旅行でしたか？」一人の看護師が聞いた。渡海はいつもの皮肉屋な表情に戻り、答えた。「ああ、とてもな。今度は君たちも誘おうか？」看護師たちは驚いた表情を浮かべ、渡海は内心で笑った。（まあ、噂の種をまくのも悪くないか）

別の病院で働いていた渡海先生のもとへ、佐伯先生が会いに来た。

病院の医局員たちはひそひそ噂する。「やっぱりあの話本当だったんじゃないの」

それは、前に渡海が東城大にいた時の話だった。渡海はよく、真夜中に仮眠室からこっそり教授室に赴いては、何事もなかったかのように部屋に戻る姿が当直の医師に目撃されていた。佐伯の方も、カンファレンス終わりにほとんど必ず渡海にちよっかいかけている、と医局員たちのなかでもっぱら話題だった。

また、渡海が帝華大へ移って、また東城大に帰ってきたとき、彼の給与を元の倍に昇給させたのは、裏で佐伯が手を回したから、という噂があった。さらには、そもそも田舎の市民病院で働いていた渡海を東城大に引き入れたのは、佐伯である、などという噂まであった。

手術の技術力において、佐伯の次は渡海である。だとしても、上記の事例を踏まえると、あまりに目をかけすぎではないか、と思われる節があるのも事実であった。

佐伯先生はあの歳で独身やし、男色ちやうか、渡海先生は愛人ちやうかと心無い噂が、当時の看護師や医局員の中で広がっていた。そこには佐伯の寵愛を一身に受ける渡海への嫉妬が背景にあった。

当時高階先生は激おこだった。

でも、渡海先生は好きにしとけ、でも仕事の支障になるなら病院から出ていけ。スタンス

佐伯先生はそういうの慣れてるんで平気。院長戦の時とかそんな心無い噂何回聞いたかしかない、といった様子だった。

そんな風のうわさは、渡海が今いる別の病院まで広がっていったらしい。

「しかしなあ渡海お前」

「お前に抱きつかれたってなんも反応せんのだよなあ」

「それは良かった。そもそも抱きつかないので安心してください、気持ち悪いですよ」

「ひどい言い草だな」

「そうだ、人工呼吸とかやったら皆どんな反応するんだろ
うか、ちょっと気になるな」

「試しに息でも止めてみようかな」

「アホか」

「……案外気にしてないんですね」

「まあ、お前がいてもいなくても、色々言われ慣れている
んでな」

「それに、渡海に目をかけていたのは事実だ」

「ただ、お前の気持ちが大事だ。もし不快に思っているの
なら私とてそれ相応の対応をするから、言ってくれ」

「俺は別に、他人がどうこう言おうとどうでもいいですが。
先生が嫌じゃないなら」

「ならいいが。我慢はするなよ。思うところがあればいつ
でも言いなさい」

「渡海」

「何です」

「心配してくれてありがとう」

「……別に」

お酒が入ってもう一ラウンド

「30歳以上離れてるんだぞ、そんなんお前、犯罪的だよ、
普通有り得ないよなあ」

「爺さん相手に欲情なんて、自分はするのか、って話だ」

「てか、そんなしょうもないことを言ってる暇があったら自分の腕磨けよ、って、」

「ごもっともだ」

「てか先生飲みすぎですよ、いくら明日休みだからって。明日も観光するんですよ。俺が運転してる間にお酒抜けなかったらどうするんです」

「ほら、水、水を飲んでください。そのままじゃ二日酔いコースですよ」

「でも、お前には殺されてもいいって今でも思っている」
「え、重……」

「愛人よりずっと重いじゃないですか」

「え、皆に聞かせたら喜ぶかな」

「悪乗りすんな」

「私の持っているもの、技術、資産、交友関係、全部あげたい」

「黒崎くんは誰よりも長い間、私を信じて献身的に支えてくれた。私は彼の恩に報いたいと常々考えている」

「高階くんだってそうだ。東城大のこれからを任せることになるのは彼になるだろう、とさえ考えている……しかし」
「私個人が何かを残したいと思う相手は、渡海。お前ただ一人だよ」

「親父のことなら、もう恨んでませんから。むしろ俺が勝手に勘違いしてたのが悪かったんだ。あんたがずっと引きずる必要はない」

「確かに、一郎先生のことでお前に負い目があるのは事実だし、それは私が医者として生きる限り消えることは無い。ブラックペアンが私の手元からなくなることは決してない」

「……」

「だがな渡海。それだけではないんだ。私は、お前の外科医としての天分にほれ込んでしまった」

「いつの間にか佐伯式を習得していたお前を、ロボット手術や先進技術を難なくつかいこなしていくお前を、その成長をずっと見ていたい。いずれお前が私を超えるところを」

「先生も、俺に負けないよう精進してください。俺の尊敬する佐伯清剛という男は、ヒラの手術職人なんかよりずっと先をいつてないとダメです」

「俺も、先生のオペ、ずっと見ていたいから」
何のわだかまりも無かったころの笑顔

「いつかあんたが現役を退く日が来たら」
医者としての重圧から逃れて、ただの人になった時、そのときは、

「まあ、面倒見てやるくらいは、してやらないでも無いし」
「死にそうになったら、切って直せるもんは何だって治してやるし」
静かにそばで支えてあげたい。

「何というか……お前も大概あれだな」

「あれだ。まずはいい人を見つけよう。私が仲人をしてやるから」

「は」

「ああでも、猫田くんは君のことを慕っているようだったから、そっちの方がいいのか？」

「猫ちゃんはそのうんじやないんで。向こうも興味ないと思います」

「残念」

「いよいよお節介の母ちゃんみたいになってきたな」

「春江さんも、その年で独り身のお前が心配なんだ」

「母ちゃんでも嫌なのに、あんたなんか説得力すらないんだから、ほっといてください」

第一章：予期せぬ再会

静岡の東城大学を離れ、出雲の小さな病院で働くようになって半年。渡海征司郎は、相変わらず口の悪い天才外科医として日々を過ごしていた。彼の噂は、この病院にも広まっていた。

「あの先生、すごい腕前なんだってさ。でも性格が最悪らしいよ」

「へえ、そうなんだ。でも、なんで東城大からこんな田舎

に來たんだろう？」

廊下で囁き合う看護師たちの声が、渡海の耳に入る。彼は心の中で冷笑した。

（ふん、お前らにや関係ねえだろ）

その日も、渡海は通常通り手術を終え、カルテを記入していた。窓の外では秋の風が木々を揺らし、病院の中は静かだった。

「渡海先生、お疲れさまです」

看護師の明るい声に、渡海は顔を上げた。

「ああ」

そっけない返事だったが、看護師は慣れた様子で微笑んだ。この病院に來てからの渡海は、以前ほど尖っていないかった。それでも、その本質は変わっていない。

「今日の夕飯は何にしようかな」

渡海が独り言を呟いていると、突然、病院の廊下が騒がしくなった。

「え？あの人って…」

「まさか…」

「本当に來たの？」

看護師や他の医師たちがざわめいている。渡海は眉をひそめた。この田舎の病院で、そんなに騒ぐような人物が来るとは思えない。

そして、その正体が明らかになった瞬間、渡海が目が大きく見開いた。

「久しぶりだな。渡海」

そこに立っていたのは、かつての上司であり、渡海にとつて父親のような存在でもある佐伯清剛教授だった。相変わらずの颯爽とした姿で、まるで昔と変わらない。

「佐伯先生？なぜここに…」

渡海の声は、驚きと戸惑いが入り混じっていた。

佐伯は、周囲の視線など気にも留めず、渡海に近づいてきた。

その声には、懐かしさと温かみを感じられた。渡海は、思わず言葉を失った。

周囲では、さらに騒がしくなっていた。

「おい、あれ東城大の佐伯教授じゃないか？」

「え？渡海先生の元上司？」

「噂じゃ、二人は愛人関係だったんだってさ」

「まさか…」

陰で囁かれる噂話に、渡海は顔をしかめた。(くだらねえ噂話…)

「佐伯先生、帰ってください。こんなところにいたら、変な噂が立ちますよ」

佐伯は渡海の言葉に首を傾げた。「噂？なんの噂だ」

渡海は苦い顔で説明した。「：愛人関係だとか」

佐伯は大笑いした。「それは面白い。でも、気にすることはないだろう？」

渡海は困惑した表情を浮かべた。「気にしないって：先生の評判に関わりますよ」

佐伯は渡海の肩を軽く叩いた。「大丈夫だよ。それより、君に休暇を取ってもらおうと思ってるね」

「は？」

渡海は思わず素っ頓狂な声を上げた。

佐伯の唐突な宣言に、渡海だけでなく周囲のスタッフたちも驚いた顔をしていた。

「今日明日は帰らない。さあ、行くぞ」

佐伯は渡海の腕を引っ張り、半ば強引に病院の外へ連れ出そうとした。

「ちょ、ちょっと待ってください！先生、何を考えている

んです？」

車に押し込められながら、渡海は抗議の声を上げた。しかし、佐伯は聞く耳を持たない。

「静岡を離れて、ずっと働きっぱなしだったんだろう？たまには息抜きも必要だ」

佐伯は運転席に座りながら、にやりと笑った。

「久しぶりにまとまった休みが取れたからな。お前と一緒にどこかに行きたくなったんだ」

渡海は呆れた表情を浮かべた。

「先生、俺、仕事が：」

「大丈夫だ。病院には話をつけてある」

「はあ：」

渡海の驚きの声に、佐伯はさらに笑みを深めた。

「嫌だったら帰っていいぞ」と言いつつも、佐伯の目は真剣だった。

渡海は一瞬躊躇したが、結局は観念したように助手席に腰を下ろした。

「まったく：相変わらず勝手だ」

二人が病院を出る時、看護師たちの囁きがまた聞こえた。

「やつぱり愛人同士の逃避行じゃない？」

「キヤー、ロマンチック！」

渡海は目を閉じ、深呼吸をした。(こいつら、本当に暇なんだな…)

佐伯は楽しそうに車に乗り込んだ。渡海は乗り込みながら皮肉っぽく言った。

「先生、俺らが旅に出たら、この病院の噂話は少なくとも一ヶ月はネタに困らないでしょうね」

佐伯は愉快そうに笑った。

「それも楽しみの一つだ」

こうして、皮肉屋の天才外科医と、甘党で知られる名教授の珍道中が始まったのだった。

第8章：思い出の旅路

車の中で、渡海は窓の外を流れる景色を眺めていた。昔のことを思い出していた。父親が生きていた頃、両親と佐伯の4人で旅行に行ったこと。佐伯と二人で食事をしたこと。どれも、今となつては懐かしい思い出だった。

佐伯の車は、島根県の山陰道を爽快に走っていた。車窓から見える日本海の景色は壮観で、渡海は思わず見とれてい

た。

「久しぶりだな、こんな風景」渡海はつぶやいた。佐伯は運転しながら微笑んだ。

「そうだね。最後に一緒に旅行したのは…君の父上が元気だった頃かな」

渡海は少し寂しそうな表情を浮かべた。

「ああ…あれから随分経ちました」

「で、どこに行くんです？」渡海が尋ねた。

「島根から始めて、鳥取、山口と回ろうと思ってる。中国地方を満喫しようじゃないか」

「はあ…」渡海は呆れたように答えたが、内心では少し楽しみにしていた。

「そうだ、お腹が空いたな。どこかで昼食でも取ろうか」

渡海は皮肉っぽく言った。

「先生、ミシュランの店なんてここにはありませんよ」

佐伯は軽く笑った。

「いやいや、地元の美味しい店を探すのも旅の醍醐味だよ。ほら、あそこに蕎麦屋があるじゃないか」

車を路肩に停め、二人は小さな蕎麦屋に入った。

「いらっしやい」

老夫婦が二人を迎えた。注文を終え、蕎麦を待つ間、佐伯は渡海に尋ねた。

「で、最近はどうだい？」

渡海は曖昧に答えた。

「まあ、なんとかやってます」

佐伯は深く追及しなかった。

「そうか。君なら大丈夫だと思っていたよ」

渡海は不思議そうに佐伯を見た。

「先生は…東城大のことは聞かないんですか？」

佐伯は首を振った。

「今は君のことが知りたいんだ。仕事の話はしなくていい」

渡海は少し安堵した様子だった。

蕎麦が運ばれてきた。佐伯は美味しそうに頬張った。

「うん、これは美味しい」

渡海も食べ始めた。

「…確かに」

食事を終え、再び車に乗り込んだ二人。渡海は唐突に聞いた。

「先生、本当に何の目的もなく俺を連れ出したんですか？」

佐伯はまっすぐ前を見たまま答えた。「本当だよ。特に意味

はない」

渡海は信じられない様子で言った。

「東城大に戻って来いとか、そういうことじゃないんですか？」

佐伯は穏やかに答えた。

「君の好きにしたらいい。私は君の選択を尊重するよ」

車は最初の目的地、出雲大社に到着した。

「ほら、渡海。ちゃんとお参りしろよ」

佐伯に促され、渡海は不器用に手を合わせた。

「先生こそ、何をお願いしたんです？」

「それは秘密だ」佐伯はにやりと笑った。

参拝を終えた二人は、境内を歩きながら静かに語り合った。

「渡海、お前は本当に成長したよ」

突然の言葉に、渡海は驚いて佐伯を見た。

「昔のお前なら、こんな突然の旅行に付き合うなんてことはなかっただろう」

渡海は少し照れたように目をそらした。「そんなことはありません。ただ…」

「ただ？」

「ただ、先生となら…」

言葉に濁す渡海に、佐伯は優しく微笑んだ。

「分かっているよ。お前と私は、特別な関係だからな」

その言葉に、渡海は何も言えなくなった。ただ、心の中で温かいものが広がるのを感じた。

車は島根県の観光名所を巡っていった。出雲大社、松江城、足立美術館…二人は昔を思い出すように、ゆっくりと観光を楽しんだ。

最初の目的地は、鳥取砂丘だった。車を降りると、広大な砂丘が二人の目の前に広がっていた。

「おお、すごいな」佐伯が感嘆の声を上げた。

渡海も思わず見とれていた。「確かに…圧巻ですね」

しかし、その感動も束の間、佐伯が突然渡海の腕を引っ張った。

「おい、渡海！あれに乗ろう！」

渡海が目を向けると、そこにはラクダが立っていた。観光客向けのラクダ乗り体験だった。

「え？いや、俺は結構です…」

渡海が抵抗する間もなく、佐伯は彼をラクダに近づけていた。

「大丈夫だ！たまには非日常を楽しもう！」

「やめてください！俺はラクダなんか…うわっ！」

渡海が必死に抵抗する姿に、佐伯は久しぶりに腹の底から笑った。

「お前、相変わらず面白い顔するなあ」

「笑わないでください！」

結局、渡海はラクダに乗せられてしまった。最初は怖がっていたが、徐々に慣れてきて、最後には少し楽しんでいる様子だった。

ラクダ体験を終えた二人は、砂丘の頂上に向かって歩き始めた。途中、渡海が突然立ち止まった。

「聞け、渡海」佐伯の声は優しくも力強かった。

「お前には、まだまだ成長の余地がある。そして、その成長を近くで見守りたいんだ。親として、師として…」佐伯は言葉を詰まらせた。渡海は驚いて佐伯を見つめた。

「先生…」

佐伯は咳払いをして、話題を変えた。「さあ、頂上まで行こう。きっと素晴らしい景色が見られるはずだ」

渡海は何も言わず、ただ頷いた。しかし、その胸の内には暖かいものが広がっていた。

砂丘の頂上からの景色は、確かに素晴らしかった。広大な砂丘と、その向こうに広がる日本海。二人は無言で、その光景を眺めていた。

「渡海」佐伯が静かに呼びかけた。

「はい？」

「お前の人生は、お前のものだ。誰かのために生きる必要はない」

渡海は驚いて佐伯を見た。

「でも、誰かのために生きることを選んでもいい。それもまた、お前の選択だ」

渡海は言葉を失った。佐伯の言葉が、彼の心に深く刻まれていった。

夕方になり、佐伯は車を温泉旅館に向けた。

「今夜はここに泊まろう」佐伯は言った。

渡海は目を細めた。「随分と豪華な旅館ですね」

佐伯は微笑んだ。「たまには贅沢も悪くないだろう？」

チェックインを済ませ、部屋に入った二人。和室の窓から

は、美しい日本庭園が見えた。

渡海はため息をついた。「…なんだか、現実離れた気分です」

佐伯は優しく言った。「たまにはいいじゃないか。さあ、温泉に行こう」

大浴場で、二人は湯船につかった。

佐伯が言った。「渡海、覚えているかい？君が初めて手術を成功させた日のこと」

渡海は少し照れたように答えた。「…覚えてますよ。先生が褒めてくれて…」

佐伯は懐かしそうに笑った。「あの時の君の表情は忘れられないよ。誇らしかったな」

渡海は黙って湯船に顔を半分つけた。（なんだよ…急に昔話なんて）

温泉から上がり、部屋で夕食を取ることにした二人。美味しい料理と地酒を楽しみながら、会話は深夜まで続いた。

第○章：酒と本音

夜も更け、部屋では二人の酒宴が続いていた。佐伯と渡海は、それぞれ酔いが回り始めていた。

「ねえ、先生」渡海が切り出した。

「さっきから気になってたんですけど…」

佐伯は優しく微笑んだ。

「何かな？」

渡海は少し躊躇いながら言った。

「あの…噂のことです。先生、本当に大丈夫なんですか？」

佐伯は首をかしげた。

「噂？ああ、愛人関係の話か」

渡海は真剣な表情で続けた。

「はい。先生の評判に関わるかもしれません。俺のせい
で…」

佐伯は大きく笑った。

「渡海、君らしくないな。そんなことで悩むなんて」

渡海は少し赤面した。

「いや、だって…」

佐伯は渡海の肩を軽く叩いた。

「大丈夫だよ。私はそういう噂には慣れてるんだ。気に
してない」

渡海は安堵の表情を浮かべた。

「そうですか…良かった」

佐伯は渡海をじっと見つめた。

「それより、君こそ大丈夫かい？」

渡海は少し驚いた顔をした。

「俺ですか？別に…」

佐伯は優しく言った。

「君は人の目を気にしすぎる。もっと自由に生きていいん
だよ」

渡海は少し照れくさそうに言った。

「…先生こそ、俺のことを心配しすぎです」

二人は顔を見合わせ、笑い合った。

佐伯はグラスを上げた。

「さあ、乾杯しよう。久しぶりの再会に」

渡海もグラスを合わせた。

「…乾杯」

酒が進むにつれ、会話はより深みを増していった。

「先生」 渡海が真剣な表情で言った。

「俺は…先生のオペをもっと見ていたかったんです」

佐伯は優しく微笑んだ。

「そうか。私も君の成長を見守りたかったよ」

渡海は少し照れくさそうに続けた。

「先生は…俺の尊敬する医者です。だから、ヒラの手術職
人なんかより、ずっと先を行ってほしいんです」

佐伯は感動した様子で渡海を見つめた。

「渡海」

渡海は顔を赤らめながら言った。

「だから……いつか、また一緒に……」

佐伯は優しく渡海の頭を撫でた。

「ああ、いつでも待っているよ」

夜が更けていく中、二人の会話は尽きることがなかった。

過去の思い出、現在の悩み、そして未来への希望。全てを語り合った。

翌朝、二人は少し二日酔い気味で目覚めた。

「うぐ……頭が痛い」渡海がうめいた。

佐伯は笑いながら言った。「若いのに弱いな、渡海」

渡海は皮肉っぽく返した。「先生こそ、年寄りのくせに強すぎます」

二人は顔を見合わせ、また笑い合った。

朝食を取りながら、佐伯が言った。「さて、今日はどこに行こうか」

渡海は少し考えてから答えた。「……先生の行きたいところでもいいです」

佐伯は嬉しそうに微笑んだ。「そうか。じゃあ、もう少し島

根を巡ろうか」

こうして、二人の旅は続いていった。それは、単なる観光旅行ではなく、二人の絆を再確認する旅でもあった。

渡海は心の中で思った。（こんな風に、先生と過ごせるなんて……本当に久しぶりだ）

佐伯も同じように感じていた。（渡海が、少しずつ心を開い

第4章：心の距離

二日目の朝、渡海と佐伯は旅館を後にした。今日は島根半島を一周する予定だ。

中国地方を佐伯先生の車に乗って旅行する二人。島根県での一泊を終え、次の目的地である鳥取県に向かって車は走っていた。初秋の柔らかな日差しが車窓から差し込み、心地よい空気が車内を包んでいた。

「渡海、どうだ？景色は綺麗か？」佐伯が運転しながら声をかけた。

「ええ、まあ」渡海は素つ気なく答えたが、その目は確かに景色を楽しんでいた。

佐伯はクスリと笑った。「相変わらず素直じゃないな」

「うるさいですよ」渡海は少し顔を赤らめながら言い返し

た。

車内は再び静かになった。しかし、それは居心地の悪い沈黙ではなく、二人にとって心地よい空気感だった。

「今日は石見銀山に行ってみようか」佐伯が提案した。

佐伯は楽しそうに笑った。「たまには違ったものを見るのもいいだろう。それに、世界遺産なんだよ」

車は山道を登っていった。途中、狭い道で対向車とすれ違う時、渡海は思わず身を縮めた。

「怖いのか？」佐伯が冗談っぽく聞いた。

渡海は素っ気なく答えた。「別に」

しかし、その様子を見た佐伯は優しく微笑んだ。「大丈夫だよ。私が運転しているんだから」

渡海は何も言わなかったが、少し安心したように見えた。

石見銀山に到着すると、二人は江戸時代にタイムスリップしたかのような景色に見入った。

「すごいな」渡海が思わずつぶやいた。

佐伯は嬉しそうに言った。「ほら、来てよかっただろう？」坑道跡や古い町並みを歩きながら、二人は静かに会話を交わした。

「渡海」佐伯が突然真剣な顔で言った。「君は本当に今の生

活で満足しているのか？」

渡海は立ち止まり、佐伯をじっと見つめた。「……どうしてそんなことを聞くんです？」

佐伯は優しく答えた。「君の才能を無駄にしてほしくないんだ」

渡海は少し苦笑いを浮かべた。「先生、結局俺を東城大に連れ戻すつもりだったんですか？」

佐伯は首を振った。「いや、そうじゃない。ただ、君が本当にやりたいことをしているのか知ってたただけだ」

渡海は深いため息をついた。「正直……わかりません。でも、今はこれでいいんです」

佐伯は渡海の肩に手を置いた。「わかった。君の決断を尊重するよ」

二人は再び歩き始めた。しばらくの沈黙の後、渡海が口を開いた。

「先生……東城大は、どうなっているんですか？」

佐伯は少し驚いた様子で答えた。「ああ、相変わらずだよ。

君がいなくなっているから、少し物足りない気もするけどね」渡海は複雑な表情を浮かべた。「そうですか……」

夕方、二人は島根半島の西端にある日本海に沈む夕日を見るスポットに立ち寄った。

絶景を前に、佐伯が言った。「渡海、覚えているか？君が初めて難しい手術を成功させた日のことを」

渡海は少し照れくさそうに答えた。「はい。先生が褒めてくれて、嬉しかったです」

佐伯は懐かしそうに微笑んだ。「あの時の君の顔は忘れられないよ。誇らしかったな」

渡海は黙って夕日を見つめていた。（なぜ先生は、こんなに俺のことを……）

宿に戻る車中、渡海が突然言った。「先生、本当にありがとうございます」

佐伯は少し驚いた様子で聞き返した。「何が？」

渡海は真剣な表情で答えた。「こうして……俺のことを気にかけてくれて」

佐伯は優しく微笑んだ。「当たり前だよ。君は私にとって大切な……」

言葉を途中で止めた佐伯。渡海は、その言葉の続きを想像して、少し顔を赤らめた。

宿に着くと、二人は再び酒を酌み交わした。今夜は昨日ほど飲まなかったが、会話は深夜まで続いた。

「先生」渡海が真剣な表情で言った。「俺は……先生のような医者になりたいんです」

佐伯は優しく微笑んだ。「君なら、きっとなれる。いや、私以上の医者になれるさ」

渡海は少し照れくさそうに言った。「そんな……先生には及びません」

佐伯は渡海をじっと見つめた。「いや、君には無限の可能性がある。私はそれを信じているよ」

渡海は黙ってうつむいた。（先生は、こんなにも俺のことを……）

夜が更けていく中、二人の間には言葉では表現できない絆が深まっていった。

第○章：別れと再会の約束

旅の最終日、二人は出雲大社に立ち寄ることにした。参拝を終えた後、二人は境内を歩きながら話をした。

「渡海」佐伯が言った。「この旅、楽しかったか？」

渡海は少し照れくさそうに答えた。「はい。久しぶりにリラックスできました」

佐伯は嬉しそうに微笑んだ。「そうか。良かった」しばらく歩いた後、渡海が突然立ち止まった。

「先生」渡海が真剣な表情で言った。「俺は…もう一度考え直します」

佐伯は驚いた様子で聞き返した。「何を？」

渡海は深呼吸をして答えた。「俺の医者としての道を。今の病院でいいのか、それとも…」

佐伯は優しく渡海の肩に手を置いた。「わかった。焦る必要はないよ。じっくり考えてごらん」

渡海は少し安心したように見えた。「ありがとうございます」

二人は再び歩き始めた。しばらくして、佐伯が言った。

「渡海、私からお願ひがある」

渡海は驚いた様子で聞き返した。「何ですか？」

佐伯は真剣な表情で言った。「君の決断を、必ず私に教えてほしい。そして…」

渡海は緊張した様子で佐伯の言葉を待った。

佐伯は続けた。「どんな決断であれ、時々連絡をくれないか？私は…君のことが心配なんだ」

渡海は少し赤面しながら答えた。「…わかりました。約束します」

佐伯は安心したように微笑んだ。「ありがとう」

出雲大社を後にし、二人は渡海の病院に向かった。車中、

二人は黙っていたが、その沈黙は心地よいものだった。病院に到着すると、佐伯は車から降りて渡海と向き合った。「渡海」佐伯が言った。「君の成長を見守れて、本当に嬉しかった」

渡海は少し照れくさそうに答えた。「先生…俺こそ、先生から多くのことを学びました」

佐伯は優しく微笑んだ。「これからも、君の活躍を期待しているよ」

渡海は真剣な表情で言った。「必ず、先生の期待に応えます」二人は握手を交わした。その瞬間、言葉では表現できない強い絆を感じた。

佐伯が車に乗り込む前、渡海が呼び止めた。

「先生！」渡海が叫んだ。「また…一緒に旅行に行きましよう」

佐伯は嬉しそうに答えた。「ああ、約束だ」

車が走り去るのを見送りながら、渡海は心の中で誓った。(必ず、先生に恥じない医者になってみせる)

病院に戻ると、看護師たちが興味深そうに渡海を見ていた。「先生、楽しい旅行でしたか？」一人の看護師が聞いた。

渡海はいつもの皮肉屋な表情に戻り、答えた。

「ああ、とてもな。今度は君たちも誘おうか？」

看護師たちは驚いた表情を浮かべ、渡海は内心で笑った。

（まあ、噂の種をまくのも悪くないか）

その日から、渡海の状態に少しずつ変化が現れ始めた。以前よりも患者に優しく接するようになり、若い医師たちを指導する姿も見られるようになった。

病院のスタッフたちは、その変化に戸惑いながらも、新しい渡海先生を受け入れ始めていた。

そして渡海は、時々佐伯に電話をかけ、近況を報告するようになった。二人の絆は、距離を超えて深まり続けていった。

（終）